



慶應  
再刻

女小學室文庫全



女小學



婦女と生れたる此の行ひ男子  
少智れり先父母乃らるる  
居く朝ふ夕なにいほくみ致ひ  
しは侍候り大やう婦女なる  
者の道志と奉るの孝子也  
嫁いりする紙帰るをいふ也





夫を以て其の地をたす  
されば其の爲に夫れ死す  
如し妻を以て其の地をたす  
如し夫を以て其の地をたす  
又其の地をたす  
事なるに其の地をたす  
事なるに其の地をたす

夫を以て其の地をたす  
されば其の爲に夫れ死す  
如し妻を以て其の地をたす  
如し夫を以て其の地をたす  
又其の地をたす  
事なるに其の地をたす  
事なるに其の地をたす

人者先を河を南あれ我より親  
み教ふまき人ならん我より為の  
道と志はく人れ人ありぬと  
見く我も又母のよきとん  
我よりまき親み教ひと接る  
むより母死すとあひ習ふ人の  
家より母らぬる我よりみ教の

是れ自ら死すと自者く我と責じ  
拙れ事成候るるも必は  
なれぬ思ふより孔子のいふ  
み毛悖れ然人を法とあはる  
ても道なき時ひぬまは行は  
なりん人よ母と親みの厚  
うらむる如何ぬらんやと問よ

兎角の事いぢく筆と紙  
と紙乞出く堪忍の忍れ字紙  
百余里ある見せ侍る人あり  
恩の何なる人よ報ひん事人の  
常之仇なる人何ぞはく報ふ  
事、道あらぬ人の云はれしと云  
呂蒙公と云ふ人の教へなり我

必の何れも責む人の思ふを  
せしむるの勿れと云ふ孔子は教へ  
我身をかつて見よ責む事ある  
数くはなり是を打捨く人紙  
責む事なれと云ふ事ならん  
是ははるなる人をも人の人を  
人をも責むるの明りなる好ま

はたは 賢く 明のなる 人も 此の  
上の 愚き 紙知る 事 一 只  
人 たり 人を 責む 人の 己 責  
家 此と 許す 人の 人 己 責  
大 座 座 座 一 人 今 交 交 交  
一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人  
あれ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ

し 先 腹 心 なる 古人 深 く  
夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
と 矢 矢 矢 矢 矢 矢 矢 矢 矢 矢  
なり 洋 小 正 計 計 計 計 計 計 計  
つ け け け け け け け け け け  
さ 然 然 然 然 然 然 然 然 然 然  
お 中 怒 り 罵 る 人 人 人 人 人 人 人 人



ねんじ事いせ杜あひの  
儘よ人と揃ひ得うも道  
阿家人の心ありて  
人の業我よ世に  
動さるる人業出  
少も家あやまらるる  
帰しと事ありて

己が心の中を  
極く  
事なるれ爰よ  
ぞとなりん  
哀れあるやう  
らぬる女の心  
なりて人

行ふは情ありて終に成る  
分ちぬ知れぬ一終人なる物  
國もあつても事なきの云ふなりと  
ねりよあつて終あるもの也  
まゝく来く道よらるれば  
一あるは事なきなる所なり  
此理と滞りあらばいさりの

事なきは終なき也  
天道の行ふは事則ち天は  
家より居て親より行ふは親  
下は富は人なる人なる事  
道なき架嫁しての男姑天は  
ワグムは終なき終は  
まの終なきは天は天は

いふ家くは物家ありて  
神を行ふたなど後修の事あり

まのうは  
獨と情むとありて獨りは  
人知ぬ玉なる業をさるに家  
花ら里知る海とねるふり  
人の濁り外も毛髪をれく種

まは浮名と流し重なる身  
と損ひ侍むいと清まし家  
人よ我れ知るる財を業  
人ふ見分らるる心と  
ありて情みあるべき事  
人よ身目に要の欲あり  
實とむらがる欲のみあり

此の人の解るれ彼よのこゝろ  
がうく情みあるべし是とて  
愛くてもし世に成なるは  
心からぬ後とも成原なる  
常に情みあることと終る  
處は清くはあはれなる  
測よのぞこじが如く  
清くはあはれなる

が如くともあはれし  
常に男姑まははる人  
物に居ても身とち  
事測よのぞこじが如く  
思へるなり

夫女よ口の辺ひありは帰嫁と  
女の徳と女社人の勝とふも  
此は居静の徳と強しうら  
此をかりて人の初るも知  
事なれば松よ情じ是なり二  
婦言は女の詞と物しひあ  
やふ口の利あるも此は社詞

夫女よ口の辺ひありは帰嫁と  
女の徳と女社人の勝とふも  
此は居静の徳と強しうら  
此をかりて人の初るも知  
事なれば松よ情じ是なり二  
婦言は女の詞と物しひあ  
やふ口の利あるも此は社詞

その如くも為に織縫業より息を  
客人の所へ吟物など寄く  
馳乞するの勤しむ事之は  
女主人なる性へ家と治む  
もの考の勤と為し  
書と見く藝と字と  
さるよの保を込に  
遠に

あるの如く幸に雨も出立  
元より里初しく年月はつら  
山も麓のらりむらり  
向空もぬるまをねむ  
黄之もあは実をの  
常より正徳後業の  
のりたれは及む

女は書物に文を添へて添へて  
庭へは花をよき花に致し  
とて人をもよき人をもよき  
真なる人を得るは人の  
人への縁は人の縁は人の  
のさしひぬるのさしひぬる

金糸車なる架  
綿なるは綿針なるは綿針  
針を色みぬるは人の縁  
師は是を師に人をもよき  
みく情は人の情は人の  
人の情は人の情は人の  
人の情は人の情は人の

仁者の一掃の行に不吉なことを  
するも又その身に災い降りたる  
の多し斗室難くわたり  
早く立ぬるも宜うまじ  
而の社事、河をくも福にあらん  
いさゝらりし婦人、涙くあはれ  
しを思ひぬれ、妹脊の中を

涙をこぼる涙のなれ、いづれ  
の和らぎの侍を、結んや  
かき入る、くまの動  
目よ、見人の鬼神、も表れ、世も  
んせ、男女の中、も和ら、者、武士の  
んを、も、射、し、る、奇、と、古、人  
よ、侍、れ、ば、敵、と、な、り、ぬ、る、も、程



今紙わき書んるをうし  
は強く又獨ゆを人の道し  
ぬるを養ふを書ける人の徳をぬよ  
ぬるをくくるを空く皇國人を  
たふした人の河に松の血をぬるぬる  
僻事は毛髪も人のひも志の  
好む人れ吾河に必くぬる

人河もまれ事河り教るを  
見よらんやらん種と見んぬ  
改免ぬれど種と見ふよ人なり  
人の河にぬる河をぬるをぬる  
人れ書ける文あり文とぬる  
ぬるはげん我をぬるぬる  
ぬる鏡も持たれぬるぬる

うつゝおのなるおのかみおのるおのはおの又おのなりおのりおのか  
 ねおのもおの心おのくおの志おのらおのびおのんおのふおのるおの

女おの小おの學おの經おの  
 女おの小おの學おの經おの

千代鶴百人一首

女中庸室文庫

女訓百人一首

教訓女孝經

女用文姬鏡

女小學寶文庫

女大學寶文庫

女今川岸姫松

書物地本  
錦繪同屋  
松林堂

東都通油町  
及園屋慶次郎板

2500

